

- 165 具瞻兼將相 具瞻將相を兼ねたることを
 166 僉曰缺勲賢 僉曰く勲賢を缺くと
 167 試製嫌傷錦 製を試みては錦を傷るを嫌ひ
 168 操刀慎缺鉛 刀を操りては鉛を缺くことを慎しむ
 169 兢兢馴鳳辰 兢兢として鳳辰に馴れたり
 170 懷懷撫龍泉 懷懷として龍泉を撫づ

【十八段】

この十句では、ますます榮進を重ね、公私ともに政に身を置くようになったこと、それに対し、不才ながらも誠実にそして精一杯帝に仕えてきたこと、又、その帝への恩に報いることが出来ないまま、この大宰の地に流されてしまったこと、そしてこの地で終焉を迎えることになるかもしれないことへのやりきれなさや無念さを詠う。この辛い心情を慰撫するものとして、百七十九句、百八十句で、潘岳・張衡の二人の事例を『文選』の賦作品より持ち出している。そしてそこに表出している古人二人の心情を我が身になぞらえ、時を得ないまま、終わりを迎えざるを得なかった者への同情と世の不条理に一層のやりきれなさや憤りを内在させて、次の「十九段」に続ける内容となっている。

- 171 脱屣黃埃俗 屣を脱ぐ黄埃の俗
 172 交襟紫府仙 襟を交ふ紫府の仙
 173 櫻花通夜宴 櫻花通夜の宴